

## 大雪の記憶

私が、まだ小学校に入る前のことである。私の生まれた十勝地方では、2～3月頃に「台湾坊主」と呼ばれる低気圧によって大雪になることがあった。ある年、大雪によって、我が家は数日間停電になった。ちょうど家のすぐ前にある電柱間の電線が切れたのである。実家は丘陵部にあり、国道から2km程山奥に入ったどん詰まりの場所に位置していた。隣家とは500m程離れており、すぐには、復旧に来てもらえなかったのだと思う。当時、飲み水は地下水をポンプでくみ上げていたので、停電のため水が出なくなってしまった。そこで、雪をガスコンロで融かして使った。大人が雪を金属バケツに詰めているシーンや、真っ暗な茶の間でろうそくの灯りを家族で囲んでいるシーンの記憶がある。家の前200mは私道だった。町道を先に除雪するため、我が家に除雪が入るまで数日かかったようだ。集落ならぬ一家孤立というわけである。ただ、災害のための特別な備えはしていなかったが、当時は、薪ストーブだったので、冬が来る前に一冬分の薪を確保していた。庭に掘られた“むろ”に食料も備蓄していた。不便を強いられたが、深刻な状況ではなかった（らしい）。

50年近く前の話である。今は、生活環境が大きく変わったので、仮に冬期に停電になったり断水したりすれば、確実に深刻な状況に陥るだろう。やはり、日頃から災害に備えておくことが肝要である。

ところで、このときの大雪はいつだったのか気になり、帯広測候所における日降雪深を気象庁のホームページで調べてみた。ホームページには観測史上1～10位の値が掲載されている。1位は1970年3月16日の102cmである。念のため、広尾観測所（旧広尾測候所）の記録を調べると、1位こそ1986年1月10日の96cmに譲るが、2～4位は、それぞれ1970年3月16日の87cm、1971年1月22日の81cm、1972年2月27日の79cmであった。私の年齢から考えると、このどれかの可能性が高いが、正確なことはわからない。さらに調べてみると、意外なことに、2000年以降で10位以内にランクインしたのは、両地点合わせて1事例だけであった。近年、甚だしい大雪の発生が増加していると言われているが、私自身は子供の頃に大雪が多かった印象があったので少し納得した。もっとも、個人の経験や記憶だけで語るのは、研究者としてはふさわしくない。「大雪の記憶」ならぬ「大雪の記録」に基づく客観的な分析が求められよう。

（雪氷チーム上席研究員 松澤 勝）

\* \* \* \*

表紙左上記号 ISSN 2432-2652の説明

国際的なコード番号であるISSN (International Standard Serial Number : 国際標準逐次刊行物番号)は、ISSN ネットワークが管理する、逐次刊行物を識別するための固有の番号です。この番号は国立国会図書館ISSN日本センターから付与されたものです。